

「神の国」のさまたげとなるもの

マタイ福音書 21:28-32

(そのとき、イエスは祭司長や民の長老たちに言われた。) 「あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい』と言った。兄は『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は『お父さん、承知しました』と答えたが、出かけなかった。この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。」彼らが「兄の方です」と言うと、イエスは言われた。「はっきり言うておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」

説教

先週に引き続き「ぶどう園」のたとえ話です。

聖書でぶどう園とくればイコール「天国」のこと、ぶどう園とは天国のたとえです。

きのうテレビを見ていたら人生100歳時代という話をしていました。これからどんどん寿命がのびてみんな100歳まで生きるぞ、という話です。これについてどう思うか視聴者アンケートをしていて、多くの人はいやだと答えていました。わたしも同じくいやなほうの一人です。そんなに長生きしたらお金がたいへんという意見の人も多かったようです。テレビのコメンテータはお金に困ったら助けてもらえばいいんだと言って、ぼくは実際助けているし、助けてもらっている人をたくさん知っているといってその一部を紹介していました。ほんとうに必要なのはお金より助けてくれる人が自分のまわりにいるかどうかだよ、お金しか信用していない人はお金のことが心配なんだ。ほ

んとに信用できるのはお金じゃなくてコミュニケーションつまり友達、仲間なんだ、という考えをしゃべっていて、わたしはたいした人物だなあと感心しました。宗教家でもそこまでいいきれぬ人はすくないでしょう。

先週のぶどう園のたとえは失業保険というよりはベーシックインカム聖書版の解説のようなたとえです。神の国では朝から働いても、昼からでも、最後にちょっとだけでも同じ給料が支払われるという気前のいい神さまの話でした。

きょうの福音は父と兄、弟の三人のたとえ話となっています。息子にぶどう園にいつて働けという、口ではいやだといったが後で考え直してぶどう園に行った兄、ハイと返事をするが実際はいかない弟のたとえ話で、イエスはユダヤ人指導者（祭司長や長老）は弟と同じで返事はいいが実際はなにもしない、だから天国には入れないというような説教で結んでいます。これだけだとあーそうなんですね、という話になってしまいませんか。そこで、ちょっとひねって福音を読んでもみます。

子どもたちにぶどう園に行きなさいという父親はおそらくぶどう園の経営者でしょう。兄はぶどう園にいきますが「後で考え直して」いくわけですから、ぶどう園についたのは早くて10時、おそければ12時、15時ってこともありそうです。先週のたとえ話にどこか通じるところがあります。（仮に）経営者の息子だとするとぶどう園に行っても野良仕事をしたとも思えません。顔をだせばそれでいいぐらいなのかもしれません。弟は要領がいいのでハイと返事して行かなかった。行ってもいかななくても同じだし、まずバレないとも計算したのでしょうか。でもバレてしまってイエスのたとえでは悪者扱いされています。でも引き続きイエスが語るたとえでは、息子がぶどう園にいつて殺されるという話（来週の福音朗読箇所）になっています。きょうの福音とつなげてしまえば兄は殺され、弟は生き延びるということになります。そうなれば弟の要領のよさは際立ちます。

ぶどう園のたとえは福音のなかに3つ出てきます。先週、今週のたとえと来週の朗読箇所です。マタイの福音書には3つともありますが、マルコ・ルカの福音書では来週朗読する箇所だけです。逆に言えばぶどう園三部作はマタイだけが伝えたイエスのことばという受け取り方もできます。福音書の中で三者三様の切り口でそれぞれ違った状況のなかでイエスのことばが語られ意味するところも少しずつ変わります。ということはマタイ、マルコ、ルカとは違った意味でイエスのことば（ロギオンというきどった呼び方もあります）を味わうことができます。たとえば、きょうの福音に登場する父、兄、弟をルカ福音の放蕩息子（ルカ15:11以下）と重ねて読んでみると兄の愚直さ、弟の要領のよさも違った意味合いで自分自身に、わたしのなかの兄の部分、弟の部分というように重ねることもできるでしょう。福音を読むことで私たちのうちに癒しと平安がありますように。